

終末期を迎えた家族への心のケア



若 者

根 岸 良 太*

Emotional care for family in terminal stage

Key Words : Terminal care, Emotional care, Family

はじめに

2003年に横浜市立大学大学院総合理学研究科で理学博士を習得してから、ポストドクターとして物質材料研究機構、理化学研究所で勤務した後、大阪大学大学院工学研究科助教として採用していただき2年近くが経ちました。今回“若手”という課題で寄稿する機会を賜り大変恐縮しつつも、さて何について書こうかと思案に暮れておりました。課題内容が“自由”と仰せつかりましたので、すこしサイエンスとは離れますが、しかしながら多くの人が直面する“終末期を迎えた家族への心のケア”について、私の経験と家族との思い出を織り交ぜながら、お話したいと思います。

父との思い出

文系出身である私の父は、特に自然科学とは縁もゆかりもないサラリーマンでした。そんな父が当時小学生の私に、高価な天体望遠鏡やたくさんの自然科学関連の百科事典を買い与えてくれたことは、今も懐かしく思います。父は心のどこかで、自然科学を愛するような大人になってほしいという願いがあったのかもしれませんが（残念ながら、専門は天文学ではありませんが）。父が体調を崩したのは、私が中学1年生の時でした。夏の夜、自宅で家庭教師を招き勉学に励んでいたところ、突然一台の救急車が自

宅に止まりました。恥ずかしながら、この時まで私は父親が体調を崩していることなど何一つ気付いておりませんでした。

父との手紙のやり取り

その後、半年間の闘病生活も空しく、父は病院で静かに息を引き取りました。後日、母から聞かされたのですが、父は入院中何度となく家に帰りたと言っていたそうです。しかし当時は今のような訪問看護や家庭医の往診による在宅ケアのシステムが普及しておらず、外泊すらできないのが実情でした。母親は、入院した父を元気づけるため私に手紙を書くよう勧めました。帰ってきた手紙は、私にとって衝撃的なものでした。大変几帳面な性格の父の筆跡は、達筆では無いものの大変規律の良いものでしたが、全ての文字が揺れ読むのが困難なほどでした。今読み返してみるとその内容は、私や兄の健やかな成長を神様に感謝し、長く家を空けてしまい申し訳ないという切なくも大変愛情深いものであることに気付かされます。ただ、私は当時父が深刻な病であることを理解できず、父の心に寄り添うことができなかったことが、今でも心残りです。

母との思い出

私が横浜市立大学大学院修士課程に進学した春でした。母親が、のどの不調を感じ検査したところ、頸椎食道がんでした。状態はかなり進行しており、すぐにも摘出しなければならない状況でした。しかしこの手術を受けると、声帯や気管支を摘出しなくてはならず、大変厳しい判断を迫られました。結局、抗がん剤の治療をして、腫瘍の状況を見てから手術をすることになりました。父の時に何もできなかった思いもあり、一先ず大学を休学して、看病に専念することにしました。毎朝病院へ行き、身の回りの



* Ryota NEGISHI

1973年9月生
横浜市立大学大学院総合理学研究科博士課程
現在、大阪大学大学院 工学研究科精密科学応用物理学専攻ナノマテリアル領域助教 理学博士 物性物理学
TEL : 06-6879-4684
FAX : 06-6879-7863
E-mail : negishi@ap.eng.osaka-u.ac.jp

手伝いやたわい無いコミュニケーションなどを通して夜まで付き添う。何ができる訳でもないのですが、ただ傍にすることで長い入院生活に母の心が塞がないよう私自身明るく振舞うことに努めました。術後の放射線治療も順調に進んでいたある日のことでした。首周りのマッサージをしていたところ、しこりのようなものに気がきました。母親には伝えませんが、検査の結果リンパへの転移が確認されました。これ以上の手術は不可能と判断し、余命を自宅で過ごすこととしました。

在宅でのターミナルケア

実に7カ月ぶりの自宅に、不自由な体とはいえ、母の顔には少しばかりの笑顔も見えました。当時私の兄は医大5年生（理学修士を取得後、医大生へ進路変更）でしたので、在宅での受け入れ準備は十分なものでした。また、訪問看護と家庭医の存在は、終末期を自宅で迎えることへの強い心の支えとなりました。4カ月後、眠るように母は息を引き取りました。普段と変わらない風景の中、時には笑顔でコミュニケーションを図り、母の気持ちに寄り添う。この数ヶ月間を通して、一生分のコミュニケーションを交わしたかもしれません。在宅療養中、何一つ愚痴を言わなかった母、表皮を突き破るほど大きくなった首の腫瘍を懸命に処置する兄の姿を見て、人はこんなにも精神的に逞しいものであると思ひ知らされました。母は、3月31日に他界したのですが、“4月から新たなスタートを切りなさい”と背中を押してくれたように感じました。

お義父さまとの出会い

恩師である横浜市立大学教授重田論吉先生から、叱咤激励を賜り、なんとか博士の学位を習得させていただきました。その一年後、結婚することとなり、お義父さまとの出会いがありました。義父は、物静かな私の父とは異なり、よくしゃべりお酒が大好きな明るい方でした。関西人らしく(?)冗談を言っただけは、よく滑っていました(笑)。そんな振る舞いに、言葉少ない私に対する義父の優しい心遣いを感じていました。工場で働く義父は、がっちりした体形で健康そのものですが、ある日突然体調を崩してしまいました。奥様に先立たれてしまい一人暮らしだったため、家内が実家へ戻ることも検討しましたが、

出産直後であったため、また義理の兄も仕事で対応できず、義父の妹様が自宅療養のサポートをすることになりました。妹様の懸命な介護もあり、一時期は体調も快方へ向かいましたが、一年後再び入院し、義父の余命が僅かであることを医者から告げられました。この時期、私はちょうど勤め先を一カ月後に退職する予定になっており、身の回りの整理をした後、十分に有給が残っていたこともあり、家内の実家へ駆けつけることにしました。病院ですでに義父は時折意識が途切れる状態ではありましたが、自宅が好きな義父の思いに配慮して、在宅でのターミナルケアを選択しました。いつ訪れるか分からない終末に対して、私自身新しい職場でのスタートを3週間後に控えていたのですが、今日の前のできごと集中しようと考えていました。自宅へ戻ってきからは、高齢と安堵ということもあったのでしょうか、急速に衰退が進み、2週間後には帰らぬ人となりました。義父のターミナルケアを通して、自宅ではほとんど意識を取り戻すことができなかったことから、この選択は義父にとって本当に良かったのか分かりませんでした。ただ、全てを終えて、家内や義兄に“ありがとう”と涙ながらに声をかけていただいた時、残される人の心のケアを少しばかりお手伝いさせていただけたのかなと感じました。

ターミナルケアを通して

父や母、義父の終末期を通して、共通して感じたことは、みんな自宅へ帰りたく願うことです。その心の中には、普段と変わらないいつもの生活へ戻りたい思いがあるのでしょうか。家族ができることは、“患者の意思を尊重して、心に寄り添う”ことです。患者がわがままを言える場所や相手は、やはり病院や医者に対してではなく、慣れ親しんだ愛着のある自宅や家族なのです。できる限り、何気ない日常を再現して、時にはユーモアのある会話を通して、患者の最期の自己決定を支えることが大切なのではないでしょうか。最後にもうひとつ、ターミナルケアとは、患者からの最期の教えでもあることに気付かされます。究極的な判断を迫られる際、家族間の絆は、さらに強いものになります。人を信じ、愛することの大切さを、患者は自らの命を通して家族へ伝えていと強く感じます。

子供たちへの思い

私は結婚してから2女の父親となりました。男兄弟で育った私にとっては、戸惑うことも多々あります。長女は、頑張り屋さんですが、かなりマイペースです。次女は2歳児にして、すでに着る服の好みがあるさいです。みんな時折泣く事もありますが、その何十倍も笑います。そして、私は彼女たちの笑顔と健やかな成長に神様へ感謝するばかりです。さて、私自身が最期を迎えるとき、病院か自宅どちらを望むのか？まだ、実感がわきません。これからも家族を支えなくてははいけませんし、微力ながら研究や教育活動を通して社会貢献もしたいと考えています。今言えることは、そこが病院や自宅であろうと、いつも通りの家族との振る舞いの中で最期を迎え、子供たちに人との絆の大切さを伝えられたらなあと思える次第です。

おわりに

私は自分のターミナルケアに関する経験談を他人に話したことがありませんでした。今回、執筆の機会を賜り、忘れかけていた記憶を辿ることで、親の愛情を再認識することができました。またこの経験は、家族や24時間いつでも駆けつけてくださいました家庭医・看護師、復学を暖かく支えてくださった先生・友人など、ほんとうにたくさんの人の助けと助言が無ければ、乗り越えられないものであったと痛感いたします。この場を借りて改めて心より感謝いたします。

最後になりましたが、執筆の機会を与えてくださいました大阪大学工学研究科森田浩教授並びに“生産と技術”の関係者の方々に感謝いたします。終わりに、私の拙い文章に最後までお付き合いいただきました読者の方々に心よりお礼申し上げます。

